

日本人や満人の心ある人に親切にしていただいたこととは、涙の出るほど嬉しかったです。苦しいこともありませんでしたが、人の情けに心から感謝しております。この感謝の気持ち、引揚げの苦勞よりも有り難いと思っております。

戦争だけでは絶対にしないでください。二度とあやまちを繰り返さないでください。昔の苦しい体験を忘れないでください。

孫に伝える私の戦争体験

青森県 中 岫 正 雄

一 広大な満州が呼んでいる

私は、昭和五（一九三〇）年十一月生まれなので、あの敗戦の年は数えの十六歳だった。今の数え方で言うと満十四歳と九カ月ということになる。私の生まれた昭和の初期は、歴史に残るように米国の株価大暴落から端を発した世界経済恐慌の嵐の中にあった。

ここ青森でも昭和六年、七年、さらに十年と冷水害に見舞われて、農民生活は悲惨のどん底にあり、それに対する政府の救済政策は極めて低調であったので、農民の日常生活は救いようのないほどに困窮して、農業への希望を失っていた。

昭和十一年に、当時の広田内閣が打ち出した七大政策の中に、「満州農業移民計画」があった。そのスローガンの一つに、「広大な満州が呼んでいる」というのがあったが、その魅力に、困窮している農民が飛びついたのも無理からぬことだった。

満蒙開拓移民団員の募集には、一定の年齢制限があり、その上限は三十九歳であったので、父はその年齢制限上限のぎりぎりの歳に移民団に入った。もしかしたらこの年齢制限が父の満州行きの決断の重要な要因だったかもしれない。

実のところ父は分家して、水田を有する小作農で、分家して九年がたっていた。その父に、何が満州行きを決意させたのか、直接的には前記の事情があったからだろうが、そのほかに考えられることは、当時の日

本人が共通して持っていた、「進取の気性」に富んでいたことで、これを見落とすことはできない。現在の人には理解できないだろうが。

父は、昭和十二年に満州開拓移民に入団し、北満と呼ばれていた松花江河畔の街、佳木斯の北方、三江省鶴立^{カクソウ}の地に、第六次東北村開拓団員として渡満したのだった。

翌年の十一月ごろに、父は家族を迎えに帰ってきて、「満州というところは治安の悪いところで、いつ何が起きるか分からない」と言っていた。父は、日本を去るに当たって、せっかく分家して得た家屋敷と水田を遠縁の者に貸して日本を離れた。

兄だけは、当時満州になかった学校に在学していたので伯父の家に預けられ、両親と姉三人、そして末っ子の私の六人が渡満した。一年後には兄も卒業して、「郵政弁事所（郵便局のこと）」に勤務することとなった。

渡満後、私は開拓団本部内に開設されていた学校に入ったが、当初は土壁の民家が仮校舎で、同じく土壁

の細長い建物が寄宿舎だった。週に一日、家に帰るという生活だった。昭和十五年の紀元二千六百年の祝賀にあわせて待望の新校舎が落成し、私たちは手に手に小旗を振って喜んだものだった。しかし、その翌年の暮れの十二月八日には太平洋戦争がぼつ発した。開戦当初は、連戦連勝で破竹の勢いであったが、昭和十八年ごろになるとその勢いにも陰りが出てきた。挙国一致、尽忠報国、堅忍持久という言葉のもとに国家総動員法が発動され、私たちも少国民と呼ばれて軍国精神をたたき込まれ、気持ちのうえからは、大人に劣らない愛国魂を植え付けられていた。

家では、満州に駐留する関東軍に大量の野菜類を貨車輸送で納入していて、多額の収益を挙げていた。また、大豆の量産と酪農にも成功し、思いがけない蓄財もできて、豊かで安定した平穏な生活をしていた。

こうした豊かさが子弟教育にも反映して、私は、東北村開拓団開団以来初めて、千振の農業学校に入学した。当時の私の第一の目標は、陸軍の少年飛行兵であった。だが、両親の反対にあってその希望は断念せ

ざるを得なくなり、結局は両親の望みのおとり、千振農業学校に進んだのであった。

父は、「千振の農業学校は、将来の開拓団の指導的人物を育成する学校であるから、国に尽くすということにかけては、決して軍人に劣るものではない」と言うのだった。

二 消滅した千振農業学校

この学校は、昭和十六年に開校したが、目的は満州開拓二世の育成指導にあった。昭和十九年からは、外務省、文部省の連携により「在滿教務部管轄、在滿学校組合連合会立甲種農業学校」という実に長い名称となり、在校生徒九十一人で全寮制であった。

昭和二十年四月、五十四人の五期生が入学し、私もその一人に入った。以前は、各学年二十二、三人程度だったので、五期生は倍増ということになった。

七月に夏休みになったが、飼育中の家畜の世話をするため半数交替で休むこととなり、八月十三日が交替日であった。

昭和二十年四月五日、ソ連は「日ソ中立条約」の不

延長を通告してきた。そしてその結果、八月九日にはソ満国境を全面的に突破して満州国内に攻め込んできた。

このニュースを私たちが知ったのは、八月十日の未明であった。校内に非常呼集のラッパが響き、教官室前に集合させられた。そこには既に、宿直の教官が数人並んでいて生徒の集合を待っていた。集合が完了するや否や、度肝を抜かれるような訓示があった。

「ソ連軍が昨日、ソ満国境を突破して侵攻中である。先刻、軍から本校に対する命令があった。全教官と十八歳以上の生徒は、これより牡丹江に向け出発する。残る生徒は、千振の警察署長の指示に従うよう。以上。諸君の武運を祈る」

十八歳以上の生徒九人が教官と共に出発し、三年生が三人、二年生が約十人、一年生が二十人余の約三十五、六人が学校に残った。

早速、警察署と連絡をとり、次のような指示を受けた。

一つ、教官室内の書類の焼却

二つ、全兵器の携行

三つ、全家畜の解放

残留生徒は、八月十二日正午過ぎに、千振警察署の指示通り学校から去った。

生徒は武装し、夏休み中の生徒の小銃や銃剣、それに軽機関銃三丁、擲弾筒てくだんとう数門を荷馬車に積み、およそ四キロメートルの道のりを歩いて街に出たが、どうしたものか道は泥だらけであった。一体どうしたのかと考えながら警察署に着いた。廊下の左側の小部屋に一人の和服の女性が眠っていたが、その着物も泥まみれになっていた。

後で分かったのだが、千振街に奥地から大勢の開拓団の人々が汽車で避難してきたが、汽車は千振から南へは動かないということで、また逆戻りして佳木斯に向かったとのことだった。あの泥濘の原因は、多くの避難民が踏みにじった跡だった。

私たちは、いったん警察署の裏庭で休憩をとり、各自、実弾六十発と手榴弾二発を受領した。

突然、「ドンン」という爆発音が起き、同時に超低

空のソ連機が頭上をかすめた。まさに奇襲そのものであった。私たちは、いよいよ来るべきものが来たとかかりに、銃剣を研ぎ着剣をした。今度は、飛行場に匪賊が乱入したという情報が入った。

千振飛行場に、匪賊が乱入するなどは考えられないことであったが、そういえば、一週間前まであれほど訓練を行っていた、陸軍の戦闘機の姿がまったくなかった。これも後で知ったことだが、そのときにはすでに全機南の空に飛び去っていて、飛行場は空っぽになっていたのであった。匪賊の乱入も納得した。

三 地獄絵を見る

八月十三日、急ぎよ匪賊討伐隊が編成され、私たち生徒三十五人を主力とし、満系警察官約十五人、日系警察官約五人が加わり、二台のトラックに分乗して飛行場に全速で向かった。砂塵もうもうであった。実弾を込めた三八式歩兵銃を、トラックの荷台に座って握りしめ空を見上げる。空は快晴だが、周りの友の顔は極度の緊張で青ざめていて、だれも声を出さない。

途中でトラックが停止した。トウモロコシ畑の向こ

う側で喚声が上がっている。間をおいてまた、「わあっ」と、群衆の大喚声が始まった。そこは宮城部落である。「宮城部落に敵が侵入しているようだ。全員下車」と、日系警察官が運転台から顔を出して叫んだ。その声につられてみんな飛び降りた。初めての实战である。それまでは空砲すらも撃つことがない。一気に宮城部落に向かって突入したが、白い服を着た一団は部落の中央広場から波が打ち寄せるように散開してきた。

「貴様ら待て！」と、日系警察官が停止を命じると、髪の長い青年が血刀をひっ下げて立っていた。その男の足元には一頭の大きな黒豚が倒れていて、のどから唸り声と共に血の泡を出していた。全員が朝鮮人の集団だった。この人たちは佳木斯方面から避難してきたが、千振近くで下車させられて、引き返すこともならず宮城部落にやってきたとのことだった。部落では既に食糧は跡形もなく持ち去られていて、やっと見つけた黒豚を食糧にしようと騒いでいたのだった。

再びトラックに乗り、飛行場に急いで駆け付ける

と、麻袋を担いだ男たちが出てきた。「それっ！ やっつけてしまえ！」と、日系警察官が叫ぶ。膝撃ちで満系警察官が一斉射を浴びせた。耳をつんざく銃声と、鼻をつく煙硝のにおいに震え上がった。「ぶっ殺せ！」と叫ぶと共に、日本刀を片手にした日系警察官が、逃げる男を追いかけて袈裟懸がけになると、牛の唸りのように絶命の声を残して前のめりに倒れた。首筋からの背中にかけて肉がまくれていた。とっさの出来事を目の当たりに見て、私は吐き気がした。こんな凄惨極まりない情景は今まで見たこともないし、想像を絶するものであった。結局、私は銃の引き金を引くこともなく、ただ警察官の後を走っていたに過ぎなかった。

四 千振街死守

八月十四日、千振街に人けが無くなって、どこからともなく散発的に銃声が聞こえるようになったが、その銃弾は、警察署に集中してきた。犬の遠吠えだけは街の各所で起きていた。

密偵による情報では、既にソ連軍が牡丹江市に迫り

つつあるとのこと。住木斯方面でもソ連軍が侵攻中で、今夜にも勃利は占領される状況であるとのことだった。

深夜、生徒全員が署内に集められて、署長から死の宣告を受けた。そのときにはもう満系の警察官の姿は無かった。彼らの残した銃だけが、事務室の壁際に並べて立て掛けてあった。

署長は、「今夜半から明朝にかけて、ソ連軍はこの千振を攻撃する公算が高くなった。よって人生最後となるかもしれない。地下室には、たくさんの食べ物が置いてあるから思う存分に食べてくれ」と言って、煙草を一本一本生徒に配って歩いた。別の警察官が、日の丸の鉢巻きを手渡しながら一人一人と固い握手をした。

地下室は、六畳ぐらいの物置風の部屋で、そこに一本のローソクが辺りを照らしていた。中央部に駄菓子と缶詰類が山と積まれてあったが、切迫した状況においては食欲などは起こらない。壁にもたれ掛かって警備の交替の時間が来るまで仮眠をしようと思うが、無

性に寂しさが込みあげ、「我が人生、十六年にしてこれで最後」という心と、父母の面影が浮かんできて、自分が哀れになった。普通ならば、みんなでわいわい言って語り合うのだが、だれもだんまりである。そこには好きな食べ物がたんまりあるのに皮肉な情景である。わずかでもいいから、この死の恐怖から逃れたい気持でいっぱいであった。

一人が煙草に火を付けると、それを見習うかのように、みんなが火を付けた。そして時々ポケットにある手榴弾に手を当てて見る。吸った煙に自分がむせて、地下室内はもうもうとしていた。息苦しさから生徒は地下室から上がって事務室に飛び込んだ。そのとき、そこで思わぬ地獄絵図が展開されていた。

人を打ち砕く恐ろしい音と、その下で打ちのめされている人間が発する断末魔の叫び声、「アイヤー！ アイヤー！」という悲痛な声、次々と骨が砕けるような音が響き渡ってくる。血なまぐさいにおいが鼻を突く。吐き気が起きた。

「次だ！ 次のやつを連れて来い」と日系警察官が

叫ぶと、死亡した男は、まるで麻袋のように引きずられて裏庭に放り出された。次に、半裸の男が拳銃を頭に突き付けられてきた。壁際には余分な銃が立て掛けられている。そこから無造作に銃を取った日系警察官が、その男の脳天をいきなり殴りつけた。「うっ！」と唸ったきりではったりと倒れた。と同時に銃床がふっ飛んで、事務所の床の上を音を立てて走った。「この野郎！ こうしておかないと、おれたちが重傷でも負ったら、やつらに何をされるか分かったもんじゃない。なあ、分かったか学生さん」と、酒に酔っている日系警察官は言った。殺された男は、敵の工作員だとのことだ。歩くと靴が滑って転びそうになった。

未明になって突如、千振を脱出せよとの命令を受けた。脱出行のため、にわか背のうに缶詰類を押し込んだ。生徒は二隊に分かれて脱出することとなり、一隊は三期生の岡田さんが率いる約十五人、もう一隊は三期生の折笠さんの率いる約十五人で、それぞれ別行動で千振を出発した。

まさしく夜明け前であった。真っ暗やみの中を扉に

ぶつかったり、道で転んだりしながら、ようやくのと街の外に出た。その日が、八月十五日だった。

五 依蘭への道

朝霧に紛れて川に出た。八虎カ川という。のどの渇きに川に顔を入れて水を飲む。十三日からほとんど眠っていなかったし、食事もまともなものは食べていなかった。体はへとへとであった。戦争というものは、こういうものだと思いがら背のうから缶詰を取り出し、銃剣でふたを開けて食べた。そこに折笠隊が霧の中から姿を現し、お互いに生きている喜びを交わして、始めて笑顔になる。それぞれが橋の下で仮眠をとった。

八時ごろから北の方角で、大地を揺るがすような爆発音が間断なく響き出したが、佳木斯の方向である。

四時間の睡眠をとり、依蘭に向かって出発した。しばらくすると前の方から側溝沿いに、現地人の小男が走ってきた。よく見るとアンペラ帽子をかぶっている。白い前歯がやけに白く見える。笑顔を見せているのだ。話を聞くとその男は、「この先の八虎カ開拓団

本部に、匪賊が五十人ばかり入ってきて本部を占拠している」と言う。そして彼は、その匪賊を討伐してくれないかとも言うのである。そこで二人の隊長は部下である両隊の生徒に相談し、男の願いを聞き入れて匪賊を掃討しようではないかということになった。

みんなは言われるままに、背のうを下ろし縦列になつて前進した。敵の銃弾が、盛んに頭の上を飛んでいた。

道路はYの字に分かれていて、右側の道の向こう側に土塀が見える。そこが開拓団本部であるらしく、そこから銃声が聞こえている。

土塀の約三百メートルぐらい前で、傘形散開に移つて、軽機関銃を中心にして一斉射をかけた。耳をつんざく銃声と煙硝のにおいが闘志をあおりたてる。何もかも初めての経験で、極度の緊張感から銃が故障して弾のふんづまりをきたすが、それも分からない。匪賊は、槍と小銃で武装しているらしい。彼らの撃つ弾が、「ぶすっ、ぶすっ」という音をたてて前後左右に土煙を上げる。小銃弾が空気を切つて金属の笛のよう

な音を発して、頭上を飛んで行く。早くも着剣の号令があつた。土塀の入り口を指して匍匐前進し、「突撃！」という声で、一斉に機関銃の声を構えて突っ込む。足が浮いて地についていないような感じである。「うわあ！ うわあ！」と、声を上げて土塀を乗り越え、本部内に突入したが、本部内にはだれもない。空っぽで、匪賊の姿は影も形もない。

不安と恐怖で、のどがからからである。水を飲みたいが、井戸水は枯れていて、周囲は水浸しである。なぜだろうかと考えたが分からなかった。

戦闘が終わつたのは十時過ぎだった。白い服装の男が五人ばかりでやってきた。朝鮮人のグループである。そこに、黒い服を着た一団の男もやってきた。

両グループは、私たちに昼食を差し上げたいと言うが、岡田、折笠の両隊長が困り果てていると、朝鮮人の一人が、「同じ日本人同士ではないか？ 私たちの所には米のご飯がある。是非、来てください」と言うので、みんな朝鮮人部落について行った。昼の太陽は頭上でぎらぎら照りつけている。正午に重大放送が

あったことなどは、私たちには知る由もなかった。この日の昼、日本は負けたのであった。

六 青森部落の婦女子

本部前の警備小屋と思われる所で仮眠して、午後二時過ぎに出発した。部落から馬車一台を提供してもらい、それにみんなの背のうを積み込んだ。ちょうどそのときに、千振の方から五、六台の馬車の一団がやってきたが、この暑いのに子供たちは防空頭巾をかぶっている。こちらから、「おーい、おーい」と、声を掛けると馬車の上から手を振って、「おーい」と、答えながら馬をせかせてやってきた。まだ千振には避難していない日本人がいたのか、と思った。それにしてもよくぞここまで無事に来れたものだと思った。そこから合流して依蘭に向かうこととなった。

馬車の列が高原に差し掛かり、車輪をわだちにとられて左右に揺れながら登りはじめたときのことである。大人たちは、馬車から下りて歩き始めた。私と並んで歩いたのは、忘れもしない工藤という五十年配の男の人だった。突然、左から一斉射を受けた。左側の

側溝に飛び込んで応戦しようとしたときに、私の銃は強い反動を受けて、銃身が曲がってしまった。「しまった」と、私は叫んだ。伏せたときに銃口に土砂を詰めてしまったのである。

一斉射に驚いた馬車は、子供だけに乗せたまま駆け出してしまった。歩いてた女性たちは泣き叫び出した。私から十メートルばかり離れた所にいる女性だけが、銃で応戦している。何か、私の足が引っぱられるような気がしたので、ふと足元を見るとあの工藤さんがしがみ付いているのだ。

「やられた、やられた」と、工藤さんがうなりながら離れずに、左腕で自分の左股を抱え込むようにしている。顔をゆがめて、「死にたくない、死にたくない」と言っている。傷を見ると外側から内側に弾が貫通して穴があいている。外側の傷は少し血がにじむ程度で、ゲートルを巻いたところが、全体にどす黒くぬれている。「傷は浅い。しっかりして」と励ますと、工藤さんは股を抱えながらその場でぐるぐる回り始めた。私は、これは重傷だと思い、自分一人ではどうに

もならないと、同期の西君に声を掛けて二人で助けることにした。西君が匍匐でやってきた。二人で工藤さんを引っ張ったが、工藤さんは重たくて動かない。そこで片足を互いに脇の下に入れながら、じりじりと側溝まで引きずり入れた。

頭上には、敵弾が悪魔の笛を吹きながら飛んでいるので、頭をあげることはできない。そのうちに、敵の射撃が散発的になった。「負傷者がいます」と、西君が岡田隊長に言ったので、岡田隊長がきて工藤さんを見て、「お前たちで馬車まで運べ！」と言うなり、「馬車が危ない。馬車の者を守るのだ！」と叫んで、走って行った。致し方なく私と西君は、工藤さんの片方の足を小脇に抱えて側溝伝いに引きずったが、大人一人を二人の少年では、とても荷が重すぎた。

太陽が西に傾き、夕やみが迫ると、だれも語る者もない。次第にやみが濃くなってきたが、赤や黄色の信号弾が上がっていて、ますます緊張の度合いが増し、おびえが強まるばかりだった。

その夜に、現地民部落にやっとたどり着くと、昨日

千振を出発した約七百人の先発集団にめぐり会うことができた。この先発集団の警護には、三期生の太田先輩以下四人がいた。そこで聞いたことには、この先の太平鎮というところは、日本人を通さないとやっているとのことであった。

太平鎮は、かの有名な謝文東の反日ゲリラの根拠地だったところである。その太平鎮を通ることができずに釘づけにされているときに、千振の警察官たちがやってきて、「何をのんびりしているんだ。ソ連軍がすぐ後にきているぞ！」と叫んで、遮二無二進んで行った。私たちも、千振の生徒全員がそろったのだから、通さないのならば、一気に攻撃して通る以外に道はないということで出発した。太平鎮の土塀の入り口に、早朝たどり着くと、既に相手の自警団が銃口を向けて構えている。それならばと、こっちは軽機を据えて散開し、「通せ」「通さない」と、お互いに武力を誇示しながら話し合っ、ただ通るだけということでは話がついた。七百人以上の避難民を乗せた五十台を超す馬車の一団は、まるでアメリカの西部劇映画のゴース

トタウンの街を、したたかに鞭でたたかれながら駆け抜ける馬車のシーンにも似たものだった。そこを抜けると、大平原が広がっていた。

七 土龍山の夜間戦闘

土龍とは、中国語で「ミミズ」のことであるが、松花江に流れる玉媽の支流の蘇木河を越した馬公屯の前方にある小高い峰が土龍山であるようだ。そこが正しく土龍山だとは確信できないが、当時見えたその全容は、大ミミズの形によく似ていたことは間違いない。

馬車の一団が、その山の裾野で止まった。そこは開拓団部落であった。道はその峰の中央辺りを越えて依頼に通じているらしい。

昨夜はだれも一睡もしていないので、午後から夕方までその部落で仮眠をとった。夕方になって山頂付近を偵察すると、既に山頂の道路にはゲリラが待ち伏せしていることが判明したので、そのゲリラを攻撃して突破することになった。つまり夜間戦闘である。

指揮官には、千振飛行場爆破班の隊長で、陸軍中尉であった人がなった。生徒全員は、にわか作りの白た

すきを掛けて識別とした。山頂まで目測で五百メートルと読んだ。両手間隔で腰を落として左右に広がり、いよいよ夕暮れと共に山頂に向かって出発した。ゲリラは、山頂に立てこもっているようだ。初めは背を低くして進んだ。風が、木の枝をゆすって吹いて来る。先頭が二十メートル前進しては伏せる。そして後方に合図すると後方が前進して伏せる。その繰り返しである。しばらく進むと匍匐前進に移った。山頂に近づくとしたがって草木が少なくなる。見上げると稜線上の空はまだ薄明るい。お互いに位置を確認しながら山頂に迫った。そのときである、目の前を火の玉が走った。全身を地面に埋めるようにして伏せていると、後方から「撃て！ 撃て！」との号令が掛かった。そして五分もたたないうちに、「突撃準備！」との声が出てきた。私は一番先頭組である。前と後から銃弾が飛んできて頭が上げられない。そのすぐ後で、「突っ込め！」と、突撃の命令が下る。後の方から喚声が起こってそれに応じて突撃すると、ゲリラは撃つだけ撃つて峰伝いに退却し、暗がりから撃ってくる。

間もなく、部落に待機中の馬車隊に対して山越えの伝令が走った。すると暗やみの下から五十台余りの馬車が、がらがら音を立てながらこつちに向かつてきた。空には星が出ている。星明かりの空をゲリラが撃っている弾が、まるで氷上に投げた氷のかけらが走るような音を残して飛んで行く。不気味ではあったが反面、いつまでもころころと激しく転げる玉の響きのようでもあった。

八月十七日の土龍山を走り下る馬車の音は、まるで雪崩のようにごうごうと音を立てていた。あの中には、青森部落の工藤さんもいたであろうが、果たして生きていたかどうか、今になれば知る由もない。

八 依蘭街、死の攻防

夜明けに朝霧が立ちのぼり、街は霧の中に眠っていた。早朝、ソ連海軍の小艦隊が依蘭に艦砲射撃をした。轟然たる炸裂弾の音に眠りを覚まされ、外に飛び出すとそここに砲弾が炸裂していた。昨日、依蘭街に入った七百余の避難民は、依蘭国民学校に収容されていた。依蘭にきて初めて関東軍の部隊（第一三四歩

兵師団）が行動しているのを知ったが、この部隊に対して、ソ連の第十五軍は佳木斯への艦砲射撃に呼应して、松花江の兩岸伝いにハルビンを目指して侵攻してきたのだった。弾幕の合間から、突然、一人の将校がきて、「君たちは、直ちに国民学校に行き、避難民を牡丹江岸に誘導して、避難させるように」と命じて走り去った。

依蘭国民学校には、総勢約二千人を超す避難民がいたが、行ってみると校舎の内外は大混乱で、婦女子は砲撃におびえきっていた。右に左に逃げ惑いながら発する悲鳴で、私たちの誘導の声は届かない。私たちは、「窓から、窓から出るんだ！ 窓枠を外せ！」と、窓をたたいて走り回った。ついに、砲弾は民家を吹き飛ばし、れんがの破片が飛び交った。その中を婦女子を誘導して、西の方に向かって走った。方向がよく分からないこと最大の理由は、霧であった。ただ、敵砲弾の唸りを背にして走った。砲弾が風を切って飛んで来る音は、文字ではとうてい表現できない音である。炸裂するときの響きもそうで、まさに音というよ

り強烈な響きなのだ。

街を出たが、その先はだだっびろい道路だった。赤土のむき出た造りたての道で、その向こうに橋がかすんで見える。私たちの後ろを悲鳴をあげながら婦女子が先を争って付いてきた。霧が晴れ、今度は敵機が銃撃を始めた。一刻も早く橋を渡らねばと、心はあせった。そのとき、前方の橋の方から炸裂弾が連発して迫ってきた。運を天に任せて地に伏すと同時に、腹を突く響きが走る。無我夢中で耳の中に草を詰め込む。煙硝にむせて立ちあがり、橋を目指して走ると砲弾の炸裂した穴にのめり込んだ。がむしゃらにはいあがり、橋の袂にたどり着くと、橋は河の途中で落ちている。私は、堤防の下においてその破壊されたところを見上げると、後からきた婦女子が集団となってその壊れた橋に殺到して、落ちていった。流れる水は赤土色で、先頭集団には橋が破壊されているのが見えならしい。濁流が人々をのみ込んでいた。

橋の上にいる者に声を掛けるが、橋から百メートル下流の堤防の下で射撃をしている日本軍の砲兵の砲撃

音で、声が届かない。

牡丹江河の堤防の下は、避難民でごった返し始めた。その堤防のすぐ近くまでソ連軍は前進してきている。その勢力は、約三個師団のソ連軍に加えて、ソ連軍に寝返った満州国軍合わせて約五万の大軍が依蘭を包囲していて、私たちは、背水の陣で退路はなかった。いよいよ彼我の攻防はし烈を極めてきた。ソ連軍は、戦闘機で間断なく攻撃を加え、地上に対し機銃を撃ってきた。

やがて、キラキラする物を投下し始めたが、真夏の青空に突然、雪が降ってきたような感じだ。四つ切り大の紙片が落ちてきたが、軍刀を抜いた将校が、「見てはならない！」と言って叫び回っている。このビラが降ってから両軍の砲火はたと止んだ。

生徒隊に、次の任務が命令された。「避難民を河の上流に誘導し、その警護をせよ。」ということである。私たちは生き残った婦女子を、堤防の下を上流に向かっておよそ二キロメートルほど走らせて退避させ、渡河準備に掛かった。両軍の停戦は正午近い頃だった

が、機を逃さずに千振農業学校生徒による大渡河作戦が開始され、およそ二千数百人を三隻の河舟で渡した。全員の渡河が終わったのは、夕暮れになった。

九 老嶺山中、死の彷徨

八月十九日、静かな朝を迎えた。昨日の激戦の後とは思えない穏やかな朝であった。午前七時ごろ、ソ連海軍のアムール艦隊が一定の間隔を保ちながら、上流に向かって見えた。上空には二機の飛行機が、旋回しながら護衛をしていた。

八月二十日、馬太屯開拓団が、匪賊の襲撃を受けて所在の避難民が混乱状態となる。その日の午後、達蓮河口という鉸山の部落で休憩しているときに、初めて日本の一個小隊の護衛を受け、ほっとした気持ちを持って出発したが、夜中になってその小隊はみんなを置き去りにして、やみの中に消えてしまった。その夜は豪雨であった。真っ暗やみに泥濘の道で、特に子連れの婦人は言語に絶する苦勞であった。時間がたつにつれて集団は前後に離ればなれとなる。生徒たちも離れてしまった。その夜に、ソ連軍と遭遇し、死闘の果

てに、やみの中に逃げ込んで死を免れた。

翌朝、昨夜の路上に戻ってみて驚いたが、ソ連軍の車両に踏みじられた死体が、泥の中にめり込んでいた。私の体は、泥酔者の如くにバランスがとれなくなっていた。

それからは、どう歩いていたのか記憶が定かではないが、たどり着いた所は、大羅密という松花江から少し離れた、老嶺の山並みが突き出たところである。そこからは本道を避けて、山道を選んで方正方面に向かった。依蘭から方正まではおよそ百キロメートルである。大羅密は方正県にあって、依蘭街と方正街との中間より少し方正街に近いところである。その背後には老嶺山脈が走っていて、山また山が続いている。

八月二十二日に、大羅密開拓団が入植していた山中の開拓部落にたどり着いた。この部落の中を道が通っていて、その先に幅十メートルもない川が流れていた。道はそこまでである。ここにたどり着くまでに別れ別れになってしまい、一緒についてきた避難民は、わずか三百人ぐらいであった。

名も知らぬ山中のこの部落で休憩中のことである。

先ほど入ってきた部落の門の方から突如、銃声が起った。私たちは銃を手にしたが、あっと思う間に撃ち合いは終わった。

部落の道端に沿って、射殺体が四十数体も横たわっていた。相手の正体は分からないが、ゲリラか、土匪といわれる者の仕業かである。井戸端のところから死体が多かった。母親が撃たれ乳房に顔をのせた幼児の腹から腸が飛びだしているのが痛々しい。手は固く握りしめたままである。その横には、胸を撃たれた父親の死体に取りすがって泣きわめく二人の少女も実に哀れであった。入り口近くでは、若妻と思われる女性が、三カ所に銃弾を受け鮮血を流したまま立っていた。

一刻も早くこの部落から出ないとさらに危険であるが、川が増水して流れが速くなっている。川の上下流に橋がないかと探したが、見当たらなかった。その状況のときに、私と同期生の菅原が部落の入り口の警備を命ぜられた。私の足元には十体ばかりの死体が横たわっていて、大きい銀蠅が飛び交っている。

部落の南側は雑木林で覆われているが、その中が風も吹いていないのに揺れている、その揺れがだんだんとこつちに迫ってきた。何か危険を感じた。やがてそれが横一線になったと見たときに、日本兵の姿をした者が飛び出してきた。とっさに私は満軍兵士と思ったが、待てよと、「菅原、あれを見ろ！」と叫ぶと、その兵士は一斉に散開を始めた。

菅原はすかさず一発撃った。同時に私も一発撃つと、満軍兵士は一斉射をかけてきた。「菅原！逃げよう」と叫んだ私は後ろの家の中に飛び込み、裏窓を突き抜けて次の家に逃げた。道路を走ると狙い撃ちされるからだ。川から銃を持って生徒たちが駆け付けてきた。約百人前後の満軍兵士に対し、こちらはわずか三十人ぐらいであったが、私たちの必死の防戦に、いったん部落内深く侵入したが、それ以上には攻撃をせずに、恐れをなして退却した。

私たちは、急いで川を渡るべく知恵を巡らして、まづ四期生の滝口さんが裸になって激流に飛び込み対岸に泳ぎ着いた。「ロープがあるぞ！」と、大声で叫ん

でいた。その声でこちら岸をよく見ると、そのロープはこっちの柳の木に結わかれていた。しかし、そのままではロープで手渡りすることはできないので張り直している、一刻も早く川を渡りたい女性たちがロープにしがみ付いて川に飛び込み、ロープをたぐりながら進んで行くが、流れの激しい場所、のみ込まれてしまう。みんな息を殺して見守る中で数人が消えてしまった。

「やめろ！ このままでは全滅してしまう」と、岡田さんがロープの前に立ちはだかった。だが、ロープの前の婦女子は、われ先にと押し寄せる。岡田さんはどなり声をあげる。「そんなに死にたいのなら、おれがぶった切ってやる。前に出ろ」と、軍刀を抜いて立ちはだかった。

柳の切り束をロープに次々と引っ掛けて、だんだんと橋らしいものになったが、実に危険な橋である。ようやく、女と子供が四つんばいになって渡り始めた。全員が渡り終わったときには、もう太陽が山に隠れるころだった。

しかし、負傷者などは部落の警備小屋のような建物に残されてしまった。母の名を呼んでいる少女の泣き声が哀れである。背負って行きたいが無理である。この人たちには死が待つだけである。声を掛けて励ましてやりたいが、何を言うべき言葉があらうか。悲惨というより無残極まりない状態に、涙も言葉も、声すら掛けることもできずにそこを去った。

川岸で、銃弾を三発も受けた若い女性が、柳の小枝にすがって立っていた。出血多量で体が小刻みに震えている。声を掛ける者もないが、その女性は対岸を見ている。岡田さんはロープを断ってしまった。

八月二十三日、私たちは日本軍の救援を求めて南下。この避難の道はいつまで続くであらうか。その先にあるものは地獄の道であった。道端に捨てられた幼児の泣き声だけが残されていく。あっちでもこっちでも、枯れた泣き声をするのだ。藪蚊に食われて泣きはれた顔が、あまりにも哀れである。

母が我が子を捨てる、それは母という女の命を捨てたことになる。

午前九時ごろに、山中に部落が見えてきた。偵察すると怪しいということになったが、念のために二人一組の縦隊で、その部落に通じる道を進むこととなった。私は、四期生の滝口さんと組んで銃を腰だめにして進むと、案の定一斉射を受けた。とっさのこと私は左側の草むらに飛び込んだ。だがその時、滝口さんがあおむけに倒れた。私は、彼の姿勢に異常を感じたので、にじり寄ると、「お母さん、お母さん」と言っている。そして口から緑色の液体が吐き出された。滝口さんを揺さぶったが動かない。かぶっていた鉄帽の真正面に弾が命中し、額から細い糸のような血が流れ出していた。四期生滝口さんは、この老嶺山中において戦死したのであった。

日時も忘れかけたころのある朝、小雨に濡れて目が覚め、辺りを見回すと白樺林の中であった。どっちが西で、どっちが東かも分からなかった。白樺の皮を銃剣でむいて紙の代わりにたき付けとして、それに銃弾から火薬を抜いてふりかけ火を起こし囲んでいると、一人の中年の婦人が寄ってきて、「兵隊さん、お願い

があります。私の息子はもう駄目です……。助からないと思います。どうかひと思いに楽にしてやってください」と言った。私たちは、互いに顔を見合わせてしまった。その婦人は、軍刀を下げた岡田さんに向かって話をした。岡田さんは嫌な顔になったが、何も言わずに、ただ、うなずいて見せた。婦人は、濡れた黒の防空頭巾を背中にだらりと下げている。白樺の太い根元に男の子が寝かせてあった。股を撃たれているようだった。「兵隊さん、お願いします」と低い声で言った。小学校の一年生か二年生ぐらいの子供で、眠っているのか動かずにじっとしている。母親は、手ぬぐいを抜き取って静かに我が子の顔にかぶせ、深く頭を下げて手を合わせてから、後ろにそろそろと下がって近くの白樺の木の根元の陰に身を隠した。

岡田さんは軍刀を静かに抜いて、男の子の前で足を開き、じっと立ちつくしていたが、手が震えていた。突然に、くるっと体を回して、隠れている母親に向かって、「自分にはできません。お母さん、あなたがやりなさい」と言って、持っていた軍刀を母親に渡し

た。母親は、その軍刀を両手で握り、我が子の前に膝をついて、「許しておくれ。許してね」と、震えながら泣き出した。次の瞬間に、「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と叫ぶと共に我が子の首を刀でこすりつけた。「バーッ」と、血が飛び散った。瞬間、男の子は起き上がって再び倒れた。母親は、刀を投げ出し泣き叫びながら走って行った。その時、岡田さんは瞬時に軍刀を拾って、その子の胸に突き刺した。

後で考えてみると、八月二十四日のことであった。

私たちは、飢えに飢えて体力が衰えてきた。何が何でも食べ物が無い状態ではどうしようもなく、餓死寸前の状態になっていた。そのうえに、夜の寒さが耐えられず、とうとう平野部に下りることとした。そして出たところが平野の見える小山だった。

遠くに悠揚として流れる松花江が光って見えていて、その平原を西の方に走って行く数十台の軍用トラックが眺められた。歌声も流れてきた。声は届くが、その歌は敵か味方かの判別はできない。状況が気になってきた。

そこで、下山する決断に迫られたが、その前に念のためと、偵察隊を出すこととなった。その結果、方正街には日ソ両軍が駐屯しているということであった。

それだけでは日本が勝ったのか、または、負けたのかは分からなかったが、午前十一時ごろに下山した。そこは伊漢通に近い千山という山の麓であった。そこで全員がシャツ姿になっている日本軍捕虜の隊列に遭遇した。「戦争は終わった。君たちも武器を捨てたまえ」と言われた。

私たちは、その日初めて日本が戦争に敗れたことを知ったのである。ここまで必勝の信念を持って頑張ってきた、張りつめた闘魂が一瞬に失墜して、ぼう然自失になっていたのである。私たちの敗戦の日は、昭和二十年八月二十八日なのである。

十 終章に当たって

その後、私たちは方正街に行き、民間人の収容所に入って冬を迎えた。

暖房のない零下三十度以下になる北満の家での生活は、それこそ想像を絶するものであり、ここまで一緒

に生きてきた学友は、飢えと寒さにより衰弱していき、次々と無念の恨みを残しながらこの世を去っていった。

強運にも何とか命拾いをして引き揚げてきた私にとって、この方正での労苦の記録は、枚数制限のあるなかではとてもではないが、書き尽くせるものではない。誠に哀れで悲しい限りである。しかしながら出来ることならば、いつの日にか記録に残し、むなしく死んでいった学友の霊を慰めたいとも思うのである。

私がこの体験記を書いている机の上に、三人の孫の写真が置いてある。男の子二人に女の子一人である。

この三人が、私を見ていて、「お爺ちゃん！頑張つて」と言っているみたいである。そこでこの爺ちゃんは、また、一文字一文字原稿用紙の升目を埋めていかなければならなくなる。かわいい孫は、みんな平和な世に生まれ育つたのだ。

五十余年前、満州の山野に捨てられた子供たちのことを思うと、涙が出て仕方がない。あんな時代には二度としたくないのだが、今の人たちは、「そんな昔の

こと？」と言って、だれも平和の有り難みが身にしみていない。

「戦争は貧困をもたらし、貧困は謙虚さを生み、その謙虚さが平和をもたらす。平和は富を作り、富は慢心を生み、慢心は戦争を起こす」とは、ドイツの哲学者ガイラーの言葉である。忘れてはならない言葉である。

祖父・父・私の満州三代記

福島県 立花 実

はじめに

大正末期から昭和の初めにかけての日本は、経済不況のどん底にあり、特に東北の農村部では、そのうえに数年続いた冷害・凶作の追い打ちで、その日その日の食べることも事欠く有様で、口減らしのため娘を売るということも日常行われており、空前の生活地獄であった。そんな生活から抜け出すには、当時国策と